

私の  
家族



この作文集は、中国の浙江工商大学日本文化研究所のよびかけにより2005年から開催され、浙江工商大学日本語言文化学院、北京大学日本語学科、大連大学日本語言文化学院、中山大学日本語学科が組織委員会となって2008年に実施した、第四回日本語による作文コンクールの受賞作品をまとめたものです。

## 私の家族

平成21年（2009年）8月20日 初版第1刷

編集・発行 有限会社国際文化工房

〒132-0035 東京都江戸川区平井5-22-9 田中ビル3階

Tel/Fax:03-3610-5882

印刷・製本 有限会社岩峰社印刷

ISBN978-4-907676-10-0

第四回「中国大学生日本語作文コンクール」受賞作品集

# 私の家族

もくじ

愛にあふれている我が家

父の手

父の愛

家出事件

## 白いセーター

日記

私の家族

出会いと別れ

愛の形

お父さんの薬

言えなかつたお礼

秘密

父の顔

家は教室



# 愛にあふれている我が家

大連大学三年生 王秋実

私が小学生の頃に日本で起こった「酒鬼薔薇」事件は、もうみんなの記憶から薄れてきています。しかし今年、日本で起きた通り魔事件は調和な社会を乱しました。その警鐘はいつも心に鳴り響いています。

社会を構成する最も基本的な単位、それは家族です。家族の安定は社会の調和と深いつながりがあります。ですから、どのようにすれば家族関係を順調に築けるかということを、真剣に考えるべきだと思います。

経験を語ったり、社会に関する意見を遠慮なく話します。また、ニックネームでお互いを呼び合い、家族の親しさも大切にするようにしています。

このような雰囲気があれば、誰も家族の平和を壊すようなことをしないと思います。このような環境で育てられた子供は「酒鬼薔薇」事件のようなことをしないだろうと思います。

中国には、「ひとつ手のひらは音にはならず」という諺があります。それは「皆の協力でしか成功にならない」ということを意味します。ここでは、親だけが努力しても、また子供だけが努力しても、何もできな

いのです。家族がただそこにいるだけではなく、同じ目標を達成できるよう、ともに精一杯努力しなければならないのです。

私の大学受験のとき、母は毎朝早く起きて、栄養たっぷりの食事を作ってくれました。一方で、勉強について解らないことがあれば父が協力してくれました。二人とも毎日仕事で忙しく、とても疲れているのに関わらず、精一杯の力で、私を助けてくれました。家族は貴重な存在として、いつも私のそばにいてくれて、ありがたいなあと私はしみじみと実感しました。

また、母が仕事のための試験を受けることになりました。その試験の準備は母をとても悩ませました。私と父は家事を手伝い、母は父と私にわからないところを質問しました。そのとき、家族全員はお互いに学び合い、助け合いました。母は試験に合格した後、こんなことを言いました。「秋ちゃんとお父さんがいなければ、合格できなかつたと思う。手伝ってくれて本当に



王秋実（オウシュウミ）：女、1987年4月生まれ。大連市出身。大連大学日本言語文化学院同時通訳クラス。2005年12月大連大学第三回“キャノン杯”日本語朗読三等賞。2006年5月大連大学日本語入力大会第三位。2006年6月大連大学第一回専門日本語作文大会三等賞。2006年6月大連大学第二回若桜杯語スピーチコンテスト三等賞。2006年3月大連大学第四回“キャノン杯”日本語スピーチコンテスト二等賞。2006年12月大連大学2005-06年度三好学生。2006年12月2005-06学年度奨学生。2008年5月大連大学第八回“キャノン杯”日本語スピーチコンテスト二等賞。2008年6月大連大学第三回日本語入力大会優秀賞。趣味はボディートレーニング・バイオリン（八級）・読書・水泳。

良かった。ありがとうね。」と。それを聞いた父は、「そんなことを言うな。お互い頼り合うのが家族だろう。」と言いました。そのときの父と母の会話は、私の心に

響いていました。日本語の「三本の矢」はそういうことを表すもつとも適當な言葉ではないでしょうか。家族の愛で結ばれた私と両親は「三本の矢」のように強く、どんな障害をも乗り越える力を持つています。

また家族全員の努力以外に、おろそかにしてはならない要素として、相互理解があります。人間はそれぞれ独立した個体ですから、皆が同じ考え方を持っているわけではありません。一緒に暮らしている家族と言えども、お互いの思想を完全に理解しあっているとは言えません。勘違いが生じた時も、相手の立場に立つて理解すれば、誤解を解消することができます。

以前、私が日本語能力試験を受けた日の朝のことでした。母は出張していて、父がその日の朝食を作ってくれました。父も仕事のため、朝食を用意した後すぐ出勤していきました。私は起きて食卓を見ました。でもそこには一本のリーセージと二つのゆで卵しかありません。それを見て、私はとても不愉快な気持ちにな

りました。「朝食は受験生にとって、どんなに大切なのかわからないの?しかも、あんなに早く起きたのに、どうしてこんなに簡単なご飯をつくるの?」と私は苛立ちを覚えました。しかし、その一列に並んだソーセージと卵を見れば見るほど、なんとなくアラビア数字の百に見えてきました。そして父の心遣いに気づきました。中国人にとって百点は満点を意味するのです。父は日本語能力試験の満点は四百点だということは知らぬのですが、私が満点を取れるようにと、朝早くから一生懸命考えて、このような朝食を用意してくれたのでしょう。一見とても簡単な朝食には父の果てしない愛情が含まれていたのです。先ほどのふさいだ気持ちちはすっかり感動に変わりました。それと同時に私は反省しました。もう少しで私は、せっかくの父の気持ちを考える事を放棄し、家族の調和を乱してしまうところだったのです。

私たち中国人は欧米人のように「愛」をいつも口に

しないため、他人の優しい気持ちを無にしかねません。たとえ家族であっても、相手の気持ちを無視することは家族関係によくない影響をもたらします。それを口にしなくても、相手の気持ちをちゃんと理解して、誤解を招かぬよう接すれば、家族との関係もより素晴らしいものになるでしょう。

私は暇な時、コーヒーを飲みながら、今は離れて暮らしている家族と一緒に過ごした楽しい時間を思い出し、幸せな気持ちで胸がいっぱいになります。そして将来、私も両親のように、心を込めて自分の家庭を作りたいと思います。私は自分の子供に、両親の愛と家族のためにがんばる気持ちを感じさせ、すばらしい家族を作りたいです。そうすれば、私も社会の平和に、小さい貢献ができます。

# 父の手

西安交通大学三年生 劉 永強

父の手はたこだらけで、ざらざらしていながら、とても力に満ちている。斧でまきを割るのは父にとって話すよりも簡単なことに相違ない。気性の激しい家畜をつかんで、家畜小屋につなぐのも落ち着いてしっかりと簡単にできる。私にとって、最も忘れがたいのは、彼が私の肩に手を置いて、空にゆっくり飛んで回るたかや、干し草の山に熟睡しているハリネズミを指差して私に見せるとき、その手から私の全身に流れる特別な暖流だった。父の丈夫な手は私に楽しい生活をもたらした。しかし、その丈夫な手で字を書くことがとても苦手なのが玉に瑕だ。父の最終学歴は小学校二年生

だ。彼が学校に通った時代には、授業で先生の質問を正しく答えなければ、手のひらを先生に木の板でたたかれたのだ。ところで、その時の父はとてもわんぱく坊主で、先生が教えた知識を真剣に頭に入れなかつたどころか、学校をサボることもよくしていた。祖父は子供が多く、余裕のない生活を維持するだけでも苦しめた。したがって、父は早い時期に退学させられ、丘陵にある畑で働かされるようになつた。

成人してから知識が乏しいためにいろいろな苦労と失敗を体験した父は、夜学に通つたこともあった。しかし、今でも父が骨を折つて書いた文章は誤りだらけ

だ。が、その字を書くのに役立たない不器用な手は、そのほかのいろいろなことを見事にできる。父が耕した畑はいつも平に整い、父が建てた犬小屋は丈夫で長年経つても水が漏れない。農作業にとどまらず、かごを編むことでも家屋を築くことでも父の技術は優れてい。父の人生にとって、彼の手が大プラスになつたといつてよい。お前の父親は頭がよく、勤勉で正直な人だと村の人々はそのように父を評価する。

母との雑談の間、母は私の生まれたときのことを偶然にしゃべったことがある。「お前は生まれたとき、泣きもしないで、大変だったよ。とても弱くて、犬の子のように小さくて、体重が三キロ足らずだったのよ。」と母が言った。「看護士がお前を抱いてお父さんに渡したら、お父さんが慌てて抱くことができず、お前を手のひらにのせて慎重に支えながら、母さんに『小さい、小さい、わが子がかわいい』と子供のようにうれしく叫んだ」と母は両腕を上げ、父の真似をして、笑いな

がらそういった。私がこの世に生まれ出たばかりの時、父の手が私の命を支えてくれたのだ。

小学校に入った私は確かに父の遺伝を受けた。その頃、私はいたずらが好きで、水泳や釣りに行って学校



劉永強（リュウエイキョウ）：男、1986年12月10日山東省生まれ。2005年9月西安交通大学外国语学院日本語学科入学、同学科卒業見込み。2005年、西安交通大学思源新生奖学金、杉山奖学金受賞。2006年、HSBC奖学金受賞。2007年の夏休みに、HSBCの支援をうけ

て地球観察研究所（EWI）が行った「中国伝統文化研究」という考察活動に参加。2007年10月、西安交通大学彭康奖学金受賞。趣味は映画鑑賞とバスケットボール。

をサボり、両親のものを盗むことまでもした。それを見つけるたびに、母はくどくと私を叱るのに対し、父は何にも言わずに私を抱んで、その大きくて硬い手で私の尻を無情に重く打つのだつた。いたずらの程度によつて、父が私を打つ程度も違つた。結局、父が手をあげると、私の心までもぶるぶると震えるようになつてしまつた。

ある日、家の近くの新築家屋に飾つたきれいなタイルが私の興味を引いた。私が勝手に石でいくつものタイルを打ち落として、部屋の壁も壊した。折り悪く、父がちょうどそばを通りかかって、私を見た。事情が分かつた父は「それらのタイルを持って、部屋の持ち主に謝りに行つてこい」と私に命令した。部屋の持ち主の处罚を恐れる私はつい「行かない」と言い返した。ガツン！ 父の手が金槌になつたようだつた。田から火花が出た、痛くて涙も出た。結局、私はすぐさまタイルを持つて謝りに行つた。幸いなことに、その持ち主は

子供の私を許してくれた。その後、私はそんなことを絶対しないようになつた。父の手が怖かつたからだ。

寒さに弱い私は、冬に入ると手袋を一日中はめいた。それでも手がいつも冷たい。注意しないと、霜焼けも出やすかつた。暇さえあれば、父は自分の手で私の手を包んで暖めてくれた。そのたこだらけの手は肌が硬くてざらざらしているけど、とても暖かかった。そして私が勉強しているとき、父はそばに座つて、私を見守るのが楽しみだつた。彼は粗い指で自分には分からない本を、きわめて慎重に開き、微笑みながら読むふりをすることもあつた。野に出て働く時間になると、彼はいつも私の頭をそつとなでてから、満足そうに立ち上がって静かに家を出て行つた。父に頭をなでられることは、私にとってこの上もない励ましたつた。私は父の期待が感じられた。その時は、父の手が柔らかく、やさしいものに見えた。

いつのことだったかは忘れたが、幼い頃、父は私を

水泳に連れて行つた。場所は村の前にある湖だった。父は水泳に長けていた。時々、彼は私を胸の前に抱えて、水の深い湖の中心部を泳いた。驚いたことに、彼は両手を使わなくても、よくバランスを取つて水面で、ゆっくり浮かぶことができた。父さえそばにいれば、小さな私はその水面の広い湖もぜんぜん怖くなく楽しめた。

幼年の私から見れば、父は思いもよらないほど力が強かつた。ある期間、私は父と腕相撲をすることに夢中になった。食事を終るとすぐ、もう待てないと父に手を伸ばした。それは父の手を倒し、卓に動けない

ほど押さえつける日が来るのを私がずっと想像していたからだった。しかし、例外なく、私が全力を尽くして、体ごと父の手にのせて、父の手は一つも動いてくれなかつた。「ほつほつ、父さんに勝とうとするか。まだ早すぎるぞ。」と父は笑つた。父が幼年私のアイドルだった。学校で大げさに仲間に自分の父のことを

話すこともあつた。父の手は私にとつて強くて頼もし  
かつた。

私の成長に伴い、いつの間にか、父との腕相撲で私  
が勝つことがだんだん増えてきた。知らず知らずのう  
ちに、父はその怖い手で私を打つことをやめ、叱るこ  
とも少なくなつた。かえつて、私の父への反発がだん  
だん増えるようになつた。父の考え方は時代遅れで古  
くさいとか、時には父の人生は平凡で失敗ともいえる  
とまで思うようになつた。意見が合わないで論争する  
とき、言葉遣いが下手な父は時々答えに詰まつて言葉  
も出なくなつた。

らにはかんばつの土地のようにあかぎれがびっしり出ていた。関節が太い指はもうほとんどまつすぐに伸ばせなくなつて、まるで父の曲がり始めた背中のようだつた。

学校に帰るとき、父はいつものように見送ってくれた。私がバスに乗つて離れた後、父は路傍に立つて、長いあいだ手を振つていた。その手を振る父の姿を見て私は「自分はどこに行つても、父の手からは出て行けないだろう。父がずっと私を手のひらで支えてくれているから。」と悟つた。

男の子が世界を征服する第一歩は父に打ち勝つことからだという。ところで、私は父に打ち勝てるんだろうか。



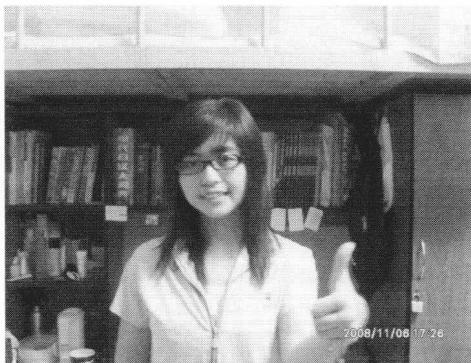
## 父の愛

福建師範大学二年生

林  
燕  
鳳

幼い頃の私には父の面影はなかった。父のことを記憶に呼び起こそうとどんなに努力をしても、やっぱり白紙に戻ってしまう。だから父の愛に触れた記憶もまたたくない。しかし、今は違う。確かに父は空気のような存在であっても、その愛をひしひしと感じることができ、私には欠かせない存在だ。そして父の愛に自分はどう感謝して、どう報いればいいのかも分からぬほどだ。

父は素朴で実直な農民だ。彼は私たち兄弟四人がまだ幼い時から、何アールもの農地を耕すかたわら、大好きな大工の仕事でわずかな収入を得て家族を支えてきた。



林燕鳳（リンエンホウ）：女、1988年8月26日生まれ。2006年9月に福建師範大学外国语学院入学。2007年に国家奖学金と福建師範大学一等奖学金。2008年9月にクラスメートと福建師範大学日本語クラブを作り、会長補佐を担当している。将来は国際関係に関する仕事に携わりたい。

もう六十歳を超えた父は昔を引きずつたままだ。時代の波に乗れないまま、何十年前のやり方にこだわっている。昨年、小学校の改修工事を引き受けた時、兄に何度も何かハイテク機器を使えば時間と労力の節約になると勧められた。だが、いくら言われても何十年も愛用してきた道具を捨てられず、昔ながらの手作業を続けた。そのせいか、今だに貧乏生活から抜け出せない。

生活苦のため、私は生後四ヶ月から高校二年生になるまで、叔母の家に里子に出された。その間、父は仕事一筋だったとはいえ、一度も私に会いに来てくれなかつた。父の腕に抱かれることも、ひげ面に触ることもなく、匂いをかぐことはおろか、父の存在すら感じることができなかつた。大きくなつても、こんな父を父親として認めることができず、正直言つて嫌いだつた。

高校生になつても、父の愛情を感じ取ることができ

なかつた。毎日が、へんひで時代遅れの山村と父から、自分を解放するための鬪いだつた。努力してして、やつと入学試験に終止符が打たれ希望校を選定している時に、父は自分の要求を突きつけてきた。「将来は田舎に戻つて教師の仕事をやつてくれ。教師の仕事はいい。仕事の場所も家に近いし、おれはお前の力にもなつてやれる。しかも教師に恵まれない山村の子供たちのためにもなれる」と勝手に決め込んで、私の思いや希望をまったく考えてくれなかつた。

田舎の煩瑣な農事、時代遅れの考え方、情報不足と不便さ、すべてが息づまるほど怖かつた。田舎のすべてに決別しようと父の願いを無視して、自分好きな専門を選んだ。ところがある日、家に戻ると、父は不機嫌で暗い顔をして「どうしておれを裏切つたんだ!」と怒鳴りだし、私にびんたを食らわせた。そして「希望校を師範学校に変えないなら、学費も何もかも自分でまかなえー」と言つて突き放した。

私は恨む目つきで父を見つめ、「幼い時に私を見捨てた父親が、どうしてそんな拘束が出来るのか。それが私を守ることになるの? お父さんの一言で私の努力を水の泡にするの? 生まれてから十何年もの間、私のことにも勉強にも何の関心も寄せてくれかったのに、今になつて何の資格でそんなことが言えるの?」と激しく言い返した。

それ以来、二人の間の溝はさらに深まつた。あれが父親の愛情なのか、もう父のわがままに引き回されたくはないと思った。私にはもう帰る家がないと覚悟して、一人ぼっちの大学生活を送つた。私はまる一年の間、一度も家に帰らなかつた。

父との犬猿の関係は、解決の望みがないまま二年が過ぎようとしていた。ところが意外なことに、今年の

夏休み前に父から電話があつて、「夏休みには帰つてきな。」と言られた。父はどうしても私を帰らせようとしているのが分つた。夏休みにはいろいろと計画を

立てていたが、父の執拗さに負けてやもなく帰ろうと決まつたとき、地獄に突き落とされるような恐怖を感じた。それと同時に心中で眠つていた憎しみが再び激しく波打つてきた。

家が近づくにつれて、息詰まるような重苦しさを感じた。私が荷物を置く間もなく、父は「隣近所の小学生たちはお前に勉強を見てもらいたいそうだ、どうだ?」と、私の帰宅を喜び、安堵して聞いた。

「何、何人の小学生のために私の時間を無駄にしようというのか。彼らのために私を犠牲にするのか。小さい時、私の事を考えてくれなかつたのに、お父さんはどうして私の時間さえも奪おうとするの?」と声を荒げた。

新たな憤りを覚え、自分の部屋に駆け込もうとして、ドアを開けた。すると、入り口の差し込む部屋から、一台のパソコンが私の目に飛び込んできた。私がずっと欲しかったパソコンだ。スクリーンから放射